



正確な情報を早く知る

大地震が来て停電が起ると、わたしたちはテレビやインターネットといった情報を得る手段を失います。このようなとき、わたしたちはどのような情報を何から手に入れればよいのでしょうか。

大地震の後、まず知りたいのは、今いる場所において安全なのか、どこの病院ならしん察が受けられるかといった命に関わる情報でしょう。停電でテレビが映らず、インターネットもつながりにくくても、ラジオはほぼ受信でき、阪神・淡路大震災のときも活躍しました。

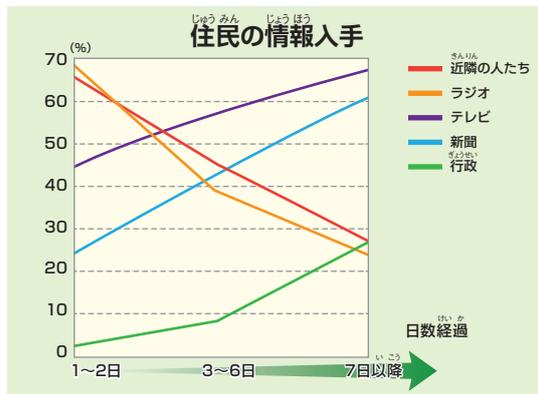
町の防災無線は、津波の高さを放送するかもしれませんが、行政の想定すらこえた東北地方太平洋沖地震では、実際に来る津波より低い津波が来るとの放送がなされた地域もあったそうです。最後にたよりになるのは、日々の防災訓練や防災教育できた自分自身の判断力です。

次に知りたいのは家族の安全でしょう。電話がつながりにくいときは、NTTやけい帯電話各社の災害伝言板などを使って連らくをとることを考えましょう。

少し落ち着くと、ひ害の全体像を知りたくなくなります。テレビやラジオ、インターネットは刻々と新しい情報を発信するでしょう。阪神・淡路大震災のとき、神戸新聞は京都新聞の協力を得て、地震当日の夕刊をひ災地に配りました。東日本大震災のとき、石巻日日新聞は、手書きのかべ新聞をひ難所に張り出しました。近所の人人も重要な情報源ですが、大災害の中で混乱している場合もあるので、まちがった情報にまどわされないようにしましょう。

災害時に家族と連らくする方法

NTT災害伝言ダイヤル「171」やけい帯電話各社の「災害用伝言板」（震度6以上の場合）で、家族間の安全確認ができます。



ひ難住民の行動実態調査 (神戸市都市問題研究所)



▲地震当日の神戸新聞(1995年1月17日の夕刊1面) (提供 神戸新聞社)

災害用伝言ダイヤル等の体験期間

- 毎月1日・15日
 - 防災週間 など
- ※しよ細は各電話会社のホームページで確認。